

『怨言』

原稿用紙換算18枚

斉藤明子 著

初めて祖母に負ぶってもらった日のことを、私は今も鮮明に思い出すことができる。知り合いの葬式の帰りのことだった。祖母は私を負ってバスに乗った。バスは混んでいて、しかも今のように優先席のようなものもなく、祖母は黙って立っていて、私は下りるべき停留所を数えていた。突然私は吐いてしまった。葬式の緊張の中で疲れていて、いつもは酔わない乗り物で酔った。さっきまで綺麗なテールに整列していた揚げ物や、お寿司が逆流し、吐瀉物は祖母の自慢の髪飾りから一張羅の喪服にまでかかってひどいにおいを発した。冬のもので、密閉された空間の中すえたにおいが広がった。がたんとバスが揺れて、そのたびに祖母の髪から胃液で溶けた米粒やころもが滴り落ちる。私は惨めで、恥ずかしくて、泣いてしまっそうだった。

祖母は次の停留所でバスを降りた。まだ家の近くの停留所までむつつもあるところだった。バスを降りても祖母は私を背中から下ろすことなく、家のほうへ歩き始めた。なま暖かかった吐瀉物は外気に触れて冷たく私の頬や、手や、祖母の髪飾りを濡らしたけれども、祖母は気にする様子もなく、りんと背を張って歩いていった。私は、泣いていた。心がすっかり縮こまってしまっていた。

ごめんね。  
私は謝った。謝らないとどうしようもないと思った。祖母は、怒りくるっていると思った。

ごめんね。ごめんね。ごめんね。  
言っている間にも私は気持ち悪くなってもう一度、今度は少し、吐いた。

ごせんえん。  
祖母が言った。南方のなまりの強い調子で。  
五千円しかね、包まなかったのよ。だって、あのひとときらいなんだもの。

私が何も言わなくても、祖母は言葉を続けた。

それでももつたいないから、私いっぱい食べたの。お寿司も、食べられないくせに高そうなうにとかいくらとかばかり。でもすぐに全部吐いちゃった。もつたいなくなかないの。あの人に言っちゃりたかったことを、全部それで吐き出したから。だからあんたも吐いていいのよ。早く帰って、いいもの食べようか。

おばあちゃんは、それから十年くらい経って私が大きくなつたことをよろこんで、おじいちゃんが死んだときあとを追って死んだ。

行き場のない悲しみをどこに棄てていいのやら今の年になつてもわからないから、私はたくさん食べてたくさん吐く。あのとのおばあちゃんの言葉は、あのと私の私には全然わからなかつたけれども、おばあちゃんに育てられることで私の中にもおばあちゃんの習性が生きていたようだった。

だからおばあちゃんの葬式の時私は親戚中が呆れかえるくらい何枚もお寿司の特上を食べて、便所でげえげえ吐いた。私はおばあちゃんと違つてお寿司のネタは全部好きだから高いのも安いのも全部食べていた。だから私が吐いたあとの便器は赤も、黄色も、緑も全部混じっていて、しかもところどころ精巧に盛り上がつたり、溶けていたりして、西方のどこかのお花畑のようだった。

おばあちゃんは花も好きだった。自慢の一軒家の、部屋の中も外も日が当たつて隙間があるところはすべて緑が覆いつくし、季節に関係なくいつも花がたわなに咲いていた。虫がわくからと私とおじいちゃんが嫌がつてもいつもどこからか縁を持ってきて、わずかに残された土の隙間を優しく掘り起こして植えた。出来上がった花壇は毎日作つてくれるお弁当よりずっと完全だった。

おばあちゃんが死んで今も花は咲き誇っていた。百合の花は今年も見事な咲き方で、食卓の横で食事にあわないにいと在りし日のおばあちゃんより大きな存在感を放っていた。私はおなべいっぱいにお煮しめを作つて百合を見ながらおなかいっぱい食べて、庭の花壇の上に吐いた。蒼み昏れゆく庭の、映える白い花の上にお煮しめの残骸がばらばらと落ちてゆく。にんじんの朱色が吐瀉物の土の上に散つて、大小の花が芽を出したようになった。私はおばあちゃん

んがやっていたみたいに丁寧に土を掘り返して、若芽を優しく花壇の奥に埋めた。こみいった作業に腐心したせいでおなかが空いたので手についた吐瀉物とも土ともつかぬものをしゃむしゃむ噛んで食べた。ごぼうのひげのすみを噛んだような味がして、唾液を含んだそれはのどをゆっくり通り抜け胃に落ちた。むかむかしたがつっぶんほどで消えた。

おばあちゃんはくりやごとのたびに私に話をして聞かせたものだった。ことにお煮しめをつくるときは好んでごぼうの話をしたがった。大東亜戦争のときはたくさんの米兵が捕虜できてね、ひねもす働くのご飯が足りなくてぐらかこっかった。だからある将校さんが同情して自分ちでとれたごぼうをあげたんだ。米兵はねありがとうありがとうって言って食べたんだよ。でも戦後米兵は自分は植物の根っこを食べさせられたって言ってその将校を戦犯にしてしまったんだ。結局将校は死刑。ぐらしか。ぐらしか。

ぐらしか、と一回言ったたびにごぼうがさがきされてゆく。ぐらしかって、どういう意味と聞いてもその言葉まで割かれて水の中であく抜きされた。見事につみあがった根の山はあー、ぐらしか、という声と共に鍋の中に吸い込まれていった。結局最後までぐらしか、の意味は説明されなかつたけれど、私はおそらくかわいそうとかそういう意味なのではないかと思っている。

ぐらしか、と一言言ってみた。誰もいない一軒家に声が響いて、柱がみしりと鳴った。

ぐらしか。ぐらしか。将校さんも、米兵さんも、柱も、おばあちゃんも私も、みんなぐらしかこつち。家にはもう誰にもいなくて、私はごぼうと同じように刻まれてあくを抜かれて、米兵の口に入ることを心待ちにしている。

おばあちゃんの歯も、がちがちとかみ合ってものを飲み込んでいた。朝にパンを買ってきては飲み込み、昼に夜にお煮しめを作っては歯を鳴らした。おばあちゃんの歯は不自然なくらい横一列に揃っていて、どんなものでもまずは一刀両断して口の中に放り込んだ。パンも、胡瓜も、ちとせあめもが仏国の王様たちのようにいとも簡単に首を落とされて暗い穴に消えた。いつもその穴からは何のにおいかわからないけれど、飛散して部屋中にたちこめて雲のようなものを作りそうな空気が漏れ出していて、誰も近くに寄せなかつた。何かあって近くに寄るときは必ず、ばれないうように息を止めた。鼻なんかつまんでしまっってはあから

さますぎるので、少し手前から息だけを止めた。特にに  
いのひどいのは眠っているときで、食卓で夕飯後に寝て  
いるおばあちゃんからは、がん患者が昏倒するときにする  
というアンモニア臭がした。毎回、死んでいるのではない  
かと思っただけ息を潜めてじっと眺めていた。ほんの少しだけ、  
はんでんの胸元が盛り上がることで生命を確認すること  
ができる。そのときはほっとしたような、劇的な死という瞬  
間をのがしてむなしような、思いがした。  
孫に、死亡確認されて、ぐらしかこつち。

私には覗き見の趣味があつて、といつてもどこかしこす  
べて覗きまわるのではなくて祖母の部屋だけなのだが、少  
し後ろめたい。もしかしたら覗き見という言葉を使うこと  
で奇異の目で見られただけかもしれない。むしろその可  
能性のほうが高くて、新聞でよく見る「ストーカー」とか  
「パパラッチ」とか、その類とは程遠い行為である。

祖母が在宅だとわかつたら、まず私が家に帰ったことを  
認知させない。ひそやかに扉を開き、板の間がきしまぬよ  
う心を尽くして歩き、そつと、祖母の部屋を覗く。見つか  
る可能性は祖母の老化に反比例した。覗いても、たいてい  
何も無い。時々祖母が呆然と座っていたり、縫い物をして  
いたりもする。どうしてかいつも、祖母の部屋のふすまは  
きつかり私の目の玉がおさまる分だけ開いていた。

私が、何食わぬ顔でわざと音を立てて自分の部屋のふす  
まを開くと祖母はあれ、と言いながら私の様子を確認しに  
来た。そして学校でのこと、自分のつくる弁当の感想、な  
どを一通り、まるで監察官かなにかのように均等に質問し  
た。私はそれに日々微妙な変化を加えながら均等に返答し  
た。

今日のにんじんは色が悪くなっていたわ。しょうゆが多  
すぎたのね。

明日は跳び箱の発表なの。緊張するわ。

あの日も、祖母の死んだ日も、私は質問の答えを考えな  
がら帰宅した。次の日には数学のレポート提出があるはず  
で、私はがんばってその日中に終えなければならなかった  
し、弁当は朝走ったせいしか片寄っていたけど味は申し分な  
かった。いつものようにひそやかに自宅に侵入し、祖母の

部屋を屈指した。

しかし、私はあの日にかぎって板の間を踏み鳴らしてしまつたのだ。これは私にとって尋常ではなく、ぎしり、というわずかな音が胸をざわめかせた。それだけではない。黒いハイソックスに白いテグスが張り付いていた。一瞬、私は部屋中に張り巡らされた畏をみすみす発動させてしまったような深い自責と焦燥の念に駆られた。だがよく見ればこのテグスはすっかり白くなつた祖母の頭髪であつた。杞憂か。気を取り直して、私は習慣となつた廊下を歩んだ。

でもおかしかつたのだ。畏でなかつたはずの白髪が、歩を進めるごとに密度を増して足に絡み付いてくる。はじめはほほえましかつたそれが大拳して足首をつかむ赤子の手のごとくなつたときに私は改めて、あの板の間の軋みが何かを伝えてきていたのではないかという冷たい予感に襲われた。

赤子の腕を引きずるようにして訪れた祖母の部屋のふすまはやはり目の玉の分だけ開いていた。

覗いて、としか言っていなかった。

覗かざるを得なかった。

また、何かがぎしり、と鳴った。

最初に目にうつつたのは祖母の顔だつた。でもそれはすぐ面にであるとわかつた。和室に飾つてあつた女の能面である。木製の面は唇と歯をむき出しにしていつもの祖母より幸せそうに笑っていた。けれども面の奥にあるべき祖母の顔は見えず、また長い白髪もおしなべてないよつたつた。そのあるべき髪は本来の場所にあらず私の足を絡めとってはなさないでいる。ただ白塗りの面の肌が若々しく油をたたえて夕方の陽光をうつしていた。体には何もまといなかつた。いつぞやは愛撫され子に吸われたろう乳房はごみ袋のように打ち棄てられ、皮膚は長い年月のなかで次第に蒸発していったというようにしなびていた。加えて祖父が死んでのちしばらくの涙によって残り少ない水はさらに外の世界に搾りとられていったように思われた。それに反して、祖母の手からは、豊満に、滝のように、ひとふさの髪の毛が流れ落ちていた。けれどもその源流たる掌は死んでいた。まっただき死でしかなかった。

私はじつくりとそれを見て、ゆつくりとふすまを閉めた。

祖母の死は、祖父の死に端を発する精神混乱のすえの異常行動が引き起こしたということですが、片付けられた。祖母が自分の手で一本一本抜いたという髪の毛は掃除機の口にまたたくまに吸い込まれてなくなった。

肉親を亡くした私、ぐらしかこつち。

叔父が来ることになった。祖母にも祖父にも似ていない叔父である。何かの事業をおこしていたけれども失敗して、ずっと苦しい生活をしていたらしい。祖母の生前はふたりの仲が悪かったこともあって一緒に暮らすことはなかったが、形見分けやらなんやらの手続きのときにうまくこの家に住む権利を獲得したらしかった。このあたりの事情を私はあまり詳しく知らない。

叔父の腹は誰もが狸にたとえるほどに出ていた。そして脳みそが出てくるのではないかと心配するほどによく笑った。事実、家に少しの荷物とやってきたときのあの笑顔は見ているだけで私を不安にさせた。その上不愉快なのは彼の口からほとばしる言葉だ。自慢話に始まって延々と自分の歴史を語り、祖母や、祖父や資本主義の精神がそれを妨げることをまるでローマ帝国時代の大シスマが現代に再現されたとでもいいたげに大きく手をふるった。そう、彼は自分を大きく見せることが大好きであった。靴には高めのかかとが欠かせないというし、声や動作を伸びやかにすることで人格すらも大きく見せることができると思っていた。彼のうつる集合写真はすべて彼が人より一歩前に出ている。彼のやってきた晩、彼はお金もないくせに家族用のお寿司をとった。彼が大きく口を開けて寿司をほおばり、話に花を咲かせているところで私は小さくうなずくだけうなずいてすべてのお寿司を一種類ずつ丁寧に口に入れた。大好きなまぐろが奥歯で噛み砕かれてのどに落ちていく感覚だけ残して消えていく。すっかり食べて満足げに横になった叔父を置いて私は庭に出た。

先日、その上に吐いた花壇の花はすっかりひしゃげて、腐っていた。あの日見た、骨のように白い花は土と同化して、かろうじてがくだけが花らしい形をとどめている。腐りゆく手のような形をして。

私はその上にまた吐いた。指をのどもとに突っ込まなく

ても、吐こう、のはの字を思っただけで吐けた。瞬く間に花壇はまた吐瀉物に覆われた。わずかに生の気配をとどめていたがくも、粉々につぶされた寿司の下につぶされた。ほとととと、と音をたてて五千円のお寿司はすべて肥料と化し、吐き終わった私はそれを丹念に土と混ぜた。くしゃくしゃになったすべてを平らになおして、眠った。

祖母が、夏みかんの中に私がいるから見つけて、という夢を見た。祖母は夏みかんが嫌いであつたから、さぞかしつらからう。同情したので家にあつた夏みかんをすべてあけてみたが祖母はいなかつた。とほうもない夏みかんの腹を割かれたのが徐々に干からびていくのを食いきる当てもなく見ている。そんな夢を見た。仏壇は私の枕元にあるので、祖母が見せたに違いない。夏みかんが嫌いなのは私も一緒である。だから我が家に夏みかんはない。さらに言えば今は夏ではない。

叔父の入ったあとの部屋はすべてくさい。何のにおいかわからないのだが、特に便所がひどい。私はそれをかくごとくに叔父を呪う。祖母もそうだった。けれども祖母のにおいはなんだかわかつていた。けものにおいである。服が翻り、私の横をすり抜けるたびに見えるがごとく立ちのぼる濃いけものにおい。特に便所を出てよくかおつた。臭元が性器なのだ。同じ女だから、すぐわかつた。においからしてとどまらぬ祖母の月経が原因の一つのように思われた。彼女はナプキンを使わずに処理をしていたし、風呂で性器を洗うことを極端に嫌つた。私が今日は月経だろうと言及すると頬を赤らめて否定した。そのわりに月経の際はイタイタイといって畳を駆けまわつて見せた。血がもれるからやめて頂戴といつてもやめることはなかつた。また、洗濯に血や組織のべつとりついたガーゼやパンツをそのまま出した。私は洗濯係だったのでそれを一枚一枚手洗いして、落ちやすくしてから洗つた。そういうところも叔父とよく似ている。やはり家族なのだ。叔父はやってきた最初の日から精液が飛んで固まつたトランクスをそのまま洗濯機に入れていた。私はやはりそれを取り出して、時間をかけて湯で汚れを落とす。きつとあのおいなのである。彼の臭元は。とすれば彼はいくさきぎきの部屋でマスターベーションをしているに違いない。だから、あんなにも、くさい。でも、彼らと同じ血を引くものだから、きつと私

もくさかるう。たくさんいればよかった。女子寮の中の女  
のにおいは空気と同質になるだろうし、コンビ二の中はあ  
まりのにおいの多さに個々のにおいが感知されない。現在、  
この家には男と女の臭気しかない。いっそ冷蔵庫の中のよ  
うにいるんなにおいが混ざってしまえばそれもまぎれるだ  
ろうに、紅白の二層だけにされているがゆえにいっそう明  
らかにあっている。

冷蔵庫にはいつもたくさんのものが詰まっていた。祖母  
は折に冷蔵庫の何段目かだけを見て舌をうち、腐ったもの  
を取り出していった。みかんや、もずく、チーズなどはす  
べて、青かったり赤かったりの黴をはぐくんだがゆえに分  
別され、一口もかじられぬまま庭の肥料にされた。祖母の  
よく言つには、世界にはこんな腐ったものも食べなくては  
いけない人がいるから、これをただ燃やすようなことはで  
きない。せめて食物連鎖の輪の中に入れてやらなくてはな  
らないとのことであった。入念にすり鉢で砕いて土にまい  
ていく祖母の一生懸命な様子は、もしかしたらこの行為が  
世界のどこかの子供の命のともし火をなからえることに繋  
がっているのではないかと私に思わせた。それを思い描く  
とき、幼き日の私の頭には二ユースで流れる呪文のような  
国名と暗い画面に飛んでいく砲弾、そして世界地図がめく  
り、そのわずかな時間に小さき世界の平和を祈った。それ  
をみていたから、今私は嘔吐するときに便所や流し台では  
なく花壇にするのかもしれない。

世界中の子供たちがしあわせになりますように。  
祈りながら私は、三食のご飯を残さずに吐く。

ある日、朝食の前に庭をぐるりと回っていると、くだん  
の花壇に緑が芽吹いているのを見つけた。昨日の食事を思  
い出してみるが、緑色のものは含まれていなかったように  
思う。さらに近づいてみると、吐き続けているがゆえ  
に沼地のようになった土壌から、柔らかな若葉が、紛れも  
なく、芽吹いていた。しかもかわいらしい様子で。私の背  
筋に、悪寒が走った。それと同時に、空っぽの胃からけも  
ののような嗚咽が湧き出してきて、私は生まれたばかりの  
命に胃液を吐きかけた。多くはなかったが若葉の死には十  
分で、数個芽吹いていたそれは塩をかけられたようにしゅ  
んとなり、吐瀉物の沼の中に消えた。目の前から消えると



どうってこともなくなつた。でも、あの、いのちというものを  
見た瞬間のおぞましい予感  
は脳髓の奥のほうに残つて  
消えなかつた。

ふと視線を感じて家に目をやると、叔父が、物干し台に立つ  
てじいつと私のほうを見ていた。光を浴びて、とても大き  
く見えた。なぐさみものにするがごとき目線に叔父の放つ  
あのにおいを感じて、私は嘔吐感を我慢しながら死角にま  
わり、こっそりと家に入った。

おぞましい出来事はこのときだけではなかつた。朝食、昼  
飯、夕飯と吐くたびに芽は芽吹いていた。むしろ吐いたそ  
の養分を吸つたように、毎度見るたびに少しずつ育つてい  
た。毎度吐瀉物の重みにつぶされ、かき混ぜられながらも  
いのちはしぶとく生を主張する。それと同じように叔父も  
その存在を私に残そうとじいつと、目を極限まで見開いて  
私を視姦し、一度瞬きをすることに私の服を一枚ずつ剥い  
で尊厳を犯した。すこしもたたないうちに吐瀉物の中に聳  
いた芽のいくつかは沈んだが、それを養分にしたように一  
本だけが成長してまっすぐ伸びた茎になりつぼみをつけ、  
叔父は物干し台からさらに近づいて玄關の扉を開けて黒目  
で私を嘗め回すようになった。私だけがいつもの様子で吐  
くことを続け、せまりくる敵にかのときの項羽の心情を  
時々理解した。もう少して花が咲く。花が咲いたら、帰  
ることができるのか。私にはわからない。ただ一心に、生  
きたいと思つた。死ぬのが怖いのではなくて生きつづけて  
いたいと願つた。なのに私のからだはおんなになり、髪が  
伸び、つめが伸び、日々削れていく。水仕事をすれば手は  
干からび、動けば汗と脂が皮膚を汚した。生まれ変わりが  
遅くなつていく。祖母のように老いたくはない。  
生への執着で、一日が過ぎることに涙が出そうになつた。  
でも私は泣かない。泣くと水分が飛んで老いる。私は生き  
つづけるために泣かない。

襟元を風が通り振り向くと叔父が私の真後ろにいた。見な  
かつた振りをしてまたかがみこむように花壇を覗くと、彼  
も同じ角度で覗き込んだ。冷や汗が私の脇を湿らす。胸の  
激動が性器を濡らす。花は花壇の中にひとり、アスパラ  
ほどの茎の先にかたく大きなたつぼみをつけている。叔父の  
指がつぼみをつまみ無理やりにつぼみの殻を剥こうと試み

た。きしりとゆがむ殻がつゆを流して一枚剥かれゆく。けれども私は花がぶるぶると震えるのを眺めおくわけにもいかず叔父の手をつかんだ。その手を叔父が逆にとった。私は子供ではない。若芽でもない。だから私は悟り、花の茎を手折った。彼女は私の中でいのかぎりをさだめられ安堵のため息をもらす。ぐらしかこつち。彼女の花は永劫葬られ本当の彼女は現れることなく死ぬ。ぐらしかこつち。水もなく、養いもなく醜く誰の養分になることもなく死ぬ。ぐらしかこつち。私は声にならない弔辞を述べ叔父に手を引かれた。板の間を割れるほど音を立ててあゆみゆく。たすけてください。私は封じられた部屋の中で叫ぶ。たすけてください。かぎりたいのちを費やして叫ぶ声は息にもみため。

叔父の部屋に私は閉じ込められた。以前祖母が使っていた部屋である。叔父はきつちりとふすまを閉めたのと同じ指で私の胸を乱暴に開いた。祖母が、むすめにそっくりね、といいながら着せてくれた白いブラウスは叔父の手の中でちりがみよりもひどいあつかわれかたで丸め放りおかれ、それよりもさらにひどい扱いで私はくさい褥に押し付けられた。握り締めていた花が不意に手から抜け落ちて枕元に落ちる。かれてしまうのねかれてしまうのね、と私の頭が言った。そうね、そうね、と私が答えた。叔父は口汚く私をのしり私の抵抗を得て己の性欲を満たそうとするけれども私は私とのむつごとをやめなかった。ただくさいと思っていた。

叔父はいよいよ頬を打ち、まらのほといれを提案した。私をけもののような姿勢にさせて、わけのわからない歌を歌いながらまらの位置を調節し、シャーレを観察するようにほとを眺め、時計の針が十二を刺したとともに詰り込んだ。声が高らかになった。おやすみなさいおねむりなさいはやくしないとしんじやうよおやすみなさいおねむりなさいねむらぬこはすててやるよ。よく聞けばロシアの民謡だった。いいえ実はよくわからない。祖母がよく歌っていた歌で、彼女がロシアの民謡だといったのだ。叔父はやはり祖母の子。下手な拍子に合わせて腰をふりふり声を荒げるがあまりに私が反応をしないので彼は私の皮膚に詰めを立てた。ああ、と嗚咽が漏れた。彼はそれに満足したのか体勢を変えて、私に彼の上のよう強制した。強制する彼は水死体のように膨れて腐っている。両手をそろえて横たわりたいしたい滑稽な死体。私は彼に乗ってみた。

思ったとおりくさくてやわらかくて死んでいる。彼はおもむろに射精をして、私はまるで悠久のときを超えてきた壺のような恍惚を感じた。私の中にすべてがあつた。ほとん飛びくをまわすようにきりきりあつく糸を吐く。理由もないのに歌いたくなつて叔父と同じ歌を歌つた。ねむらないとしんじやうよねむらないとすてるよ。叔父は歌つてばかりで動かぬ私に腹をたて、再び口汚くののしつた。それでも歌は快樂をこぎまわして私を落とし蹴りつき飛ばし打ちたる。叔父さん、私に罰を頂戴、と、私が言つたのか彼が言つたのかハタマタどこかのかげなき存在が言つたのか私にはわからない。歌が舌となり耳をなぜ中耳まで蜂蜜のような唾液を注ぎ込んで聴覚を滅す。叔父の爪が肌に稲穂をいっばいにいっばいに裏の山にむかし拓かれる前咲いていたように描いて触覚を滅す。精子がすでに部屋中に撒き散らされていて鼻なぞ効かぬ。おかしかもぞかおかしかもぞか祖母が私を形容したことが私の髪を一本一本抜いて拷問をする。拷問は効かんしえん。私には話すべき何事すら残つていない。

祖母が死んだからだ。

死んだからこんな、目に。

目が、目線があつた。

叔父の部屋のふすまが開いている。

ちやうど目の玉のおさまる分だけ。

そこにうるわしくきらめく目の玉があつた。若い目の玉。年をとつてたくさんの血液を流し時には愛を告げ時には悲しさを演出してすでに黄ばんだ血管のないわこうどの目。祖母は私の眼球を求めていたといまやつとにわかつた。黄色くにこつた自分のものではなくうるんだ、みずみずしい私の眼球からあなたはあなたを見ていたかつた。そうでっしゃろうそうでっしゃろう。

あの日細い光の中で写し取られていたのは性交だつた。私の背中にはランドセルの皮のにおいがつきまとい、重いものをさらに重くしていた。夕方の陽光のなかおばあちゃんはおじいちゃんの上に全裸でまたがりほとから黄色くにこつたつゆを飛ばしていちに、いちに、と上下にからだを揺らした。ひからびたはずの皮膚に汗の粒が光を含んでながれをつくり戦争で死んだぞうの死にぎわのようだつた。おじいちゃんはまだ寝ていた。おばあちゃんだけがけものでありおんなでありいきつものであつた。枯れ木のような自己の手でたらちねを揺さぶりおおとこえをあげ引つ

張つてきて自分の乳首をくちびるで弄んだ。ようようみるとおばあちゃんの鎖骨からおっぱいにかけてだらりと何かたれている。目が充血するまでそれを眺めた。ときおり振動でふれ落ちはらわれるそれは何だったか。わかる前におばあちゃんが私の目の玉を見た。おばあちゃんはにっこりと笑って上に歪んだ口角からどろりどろりと

口がぼったりしたもので覆われて息ができぬ味覚がきかぬと思わんうちにどわっとげろが出てきて、叔父の顔にかかった。かえるみたいな表情になった叔父に居心地の悪さを感じる前にまたげろがでてきた。ごおお、うおお、おおん、けもの臨終のごときひどい声がでてきた。口は自由にならず、土色のげろが最初いくらか出て、そのあとに死んだ小さな魚とか、一昔前の雑誌とか犬の足とか牛の舌とかが混ざり合ったげろが泥水のような透明と砂色の中間くらいの色をしてごろごろと飛び出し続けた。おっぱいのおいがする。目だけが叔父の顔をかたちどりながら広がってゆくげろをいていた。髪が浅瀬になりまくらが沼となりあふれあふれて褥をはみ出した。そこにくだんの茎があった。もう老いている。勢い余ったげろがどほりとかかった。くうううう鳥の高く鳴く声が出て茎がげろを吸い上げた。吸い上げた先から茎に繊毛が立ちしわが張り葉があおあおとする。のぼり登って若気はつぼみをふるわせた。先刻叔父にはがれそうになりはがれなかったつぼみがゆっくりと開いた。白い菊の花だった。祖母の、葬式の棺に皆で入れた菊だった。

おおおお、口から、目から、耳から鼻からいっぱいにげろがこぼれだした。脳みそがとろけてはみ出て夜叉になってゆくよう。しかしのどの奥が急にひらけていきなりに風が通った。

あんがとがした

声が絞り出た。

あんがとがした

あんがとがした。

げろが流れ出つづける限り感謝の言葉が続いた。はじめはげろの中でもだえ、泡沫を浮かび上がらせていたのが、叔父は静かだ。まらだけが硬い。

あんがとがした。

またあつしゃあいやそ。

ふすまの向こうで板の間が鳴った。

『怨言』 齊藤明子著

[sakka.org](http://sakka.org)